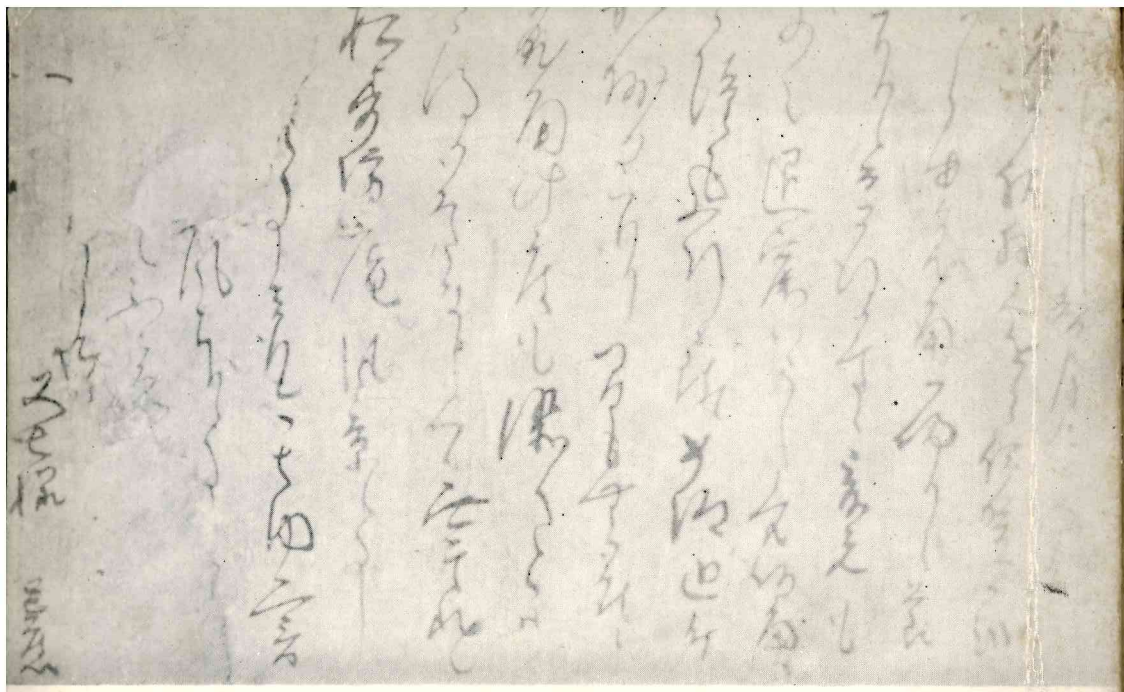

近世文芸 **資料と考証**

七人編 VOL. III

'64 2 23

■
山際考／板坂元 2
おくのほそ道生物季節考Ⅱ／中西啓 8
■
志太野坡年譜／大内初夫 16
■
馬鹿集・翻刻／榎坂浩尚 33
立圃三点＞西日本俳諧資料散歩Ⅲ／白石悌三 77
月岑稿本増補浮世絵類考Ⅱ／板坂元・棚町知弥 113
■
貞門談林俳人大観Ⅲ／榎坂浩尚・今栄蔵 89
■
新出芭蕉支考書簡紹介＞表紙解説／石川八朗 73
■
コギト同人の杉浦君＞杉浦忌によせてⅢ／田中克己 14

■
発行／七人社／福岡市大浜４丁目52白石医院内
印刷／株式会社川島弘文社／福岡市長浜２丁目46
振替／福岡15560　定価／400円　送料150円

近世文芸
資料と考証

コギト同人の杉浦君

〈杉浦忍によせて 3〉

田中克己

このごろ必要があってコギト（昭和七年三月発刊）のことをしらべてゐると、杉浦君がなかなか熱心な同人であったことを実証し得た。この雑誌の創刊当時の同人十何人のうち、最も熱心な一人ではなかったかと思ふ。

わたしは高等学校時代から杉浦君の文学好きは知ってゐたが、そのころは三崎皎といふ筆名で短歌を作ってゐた。筆名のわけも問はず、神戸一中か三中から来て、クラスもちがったので特別に親しかったともいへないが、コギト同人となってからは確かに親しくした。そのくせ彼が熱心に作った小説をあまりよくも読まなかったやうな感じで、今となっては悪いことをしたと思ってゐる。ただし純文学にすすんだ方が、もっとよかったとか、そんなことは死なれた今となってはもとより生前も一度も考へてみなかった。一等、彼にふさはしい途を進んだのだと信じる気持は嘘ではない。

それにしても彼が熱心に作った小説がどんなテーマで、どんな風だったかは、コギトを見ることも少くなった今、一応紹介しておく義務を感じる。わたしは薄くなった視力でもう一度コギトをよんでみる。

コギトは昭和七年わたしたちが大学へ入学してほぼ一年たったころの創刊で、命名者は保田与重郎、名をきめるときにも杉浦は杉浦らしい題を出したやうに思ふがそれは覚えてゐない。ともかくプロレタリア文学が終りに近くなったころ、同人雑誌を出さうとしたわれわれには何か理想があったはずだが、それも話題にはならず、ただ高校以来の気心のよくわかる連中だから、まるきりチグハグにもなるまいと持ち寄った原稿が、そのまま印刷になった。杉浦の作品はその中で一種、特徴をもってゐた。創刊号の小説は「あど・ばるうん」といふ題で、「海港紀」といふ副題がついてゐる。その第一行はかういふ文章である。

真白い船が防波堤を、くるりと廻って、港を出てゆくと、人びとは落葉の様に華かに、街の方へ散って行った。

なかなか凝った文章だと思ったらまちがひだらうか。全部たぶん神戸の港を背景にして兄のみが知ってゐる実妹の、それと知らぬ愛情を、といふと、変に戦後の小説を思ひ浮べさすが、さうでなくて書いてゐるのである。わたしなど正直ものだから、このとき杉浦に、設定する場面をどうして兄妹の愛情にするのだといって詰問したやうに思ふ。もとより杉浦は、わからないのかなあといふ、例の困ったやうな表情を浮べてゐたと思ふ。

コギト第二号には杉浦は詩をかいた。しかし四号には海港紀その二といふ副題で、「高架線の記憶」といふ小説を書いてゐる。神戸の南京街の陳氏といふ華僑に拾はれ養はれた鮮人の娘が、物心ついてから父の手紙をもらふ。それは朝鮮字で書いてあって、苦心して読んでもらふと「春になったらお前をむかへにゆくからな。まって居ろよ」と書いてあるきりだった。この手紙が毎年来て、差出し場所が次第に遠のいてゆく。手紙をよんでくれるのは高架線工事の工夫であるが、この工事の完成したあと一番列

車で、この娘は轢かれて死ぬ、轢かれ方は「新鮮な魚のやう」であったといふのがあらすじである。わたしはこの小説はほめた様に思ふ。杉浦は元気づいたか五号にも海港紀をかいた。「離合」といふ題で姉をなくした妹と青年との感情を書いてゐる。どうも死を書くのが好きだなと気がついたがわたしはその理由をたしかめなかったとおもふ。杉浦のセンチメンタリズムだと片づけたのであらう。この文章を書くため、これらの作品をよみ直してゐて、ふとわたしは落涙しさうになった。わたしより先に死んでこんな文章を書かすのは残酷だと思ふのだが、あのころ死を彼は本当はどう思ってゐたのだらう。

実はわたしは死のことは卒業して、このころは生のことを考へてゐた。ブハーリンやプレハーノフなど当時流行のマルクス主義の本をよんで、革命必至それも近々と考へてゐた。それでよけい杉浦の文学、ないしそれを書かすものを探求しなかったのだと思ふ。満洲事変が勃発し、シナ事変の用意されてゐたころだといふことを考へてほしい。

ムードだけの革命論者のわたしは大学はわりあひ良く出席した。杉浦と並んで聴き、ならんで受けたのが志田先生の「蕉門の十哲」といふ試験であったが、わたしはみごと落第した。東洋史専攻のくせになぜとるかと志田先生が考へられたのだと思ふ。杉浦はもとより及第して、これが彼をして一生の間、俳諧史をやる機縁になったのだと思ふ。

杉浦の紹介で早稲田の国文科で谷崎精二先生の弟子だといふ佐藤竹介と仲好くなったのは、昭和八年の秋ごろからである。彼は熱心な文学青年で、ある日、下宿へ訪ねてゆくと中年の小母さんの話をノートしてゐる。これがどんな作になったかは知らなかったが、二篇ばかりよまされた作は杉浦とはちがって、情景のはっきりした、わたしにとってはずっと好きなものだったので、わたしは大変感心した。早稲田界隈を歩いた時も、たぶんいつも杉浦が一緒だったと思ふ。この佐藤君はＮＨＫに就職してすぐ出征し、漢口作戦の直後かに戦死した。一遍の回向をたのむといって来たのはもとより杉浦である。

杉浦はコギト二十号（昭和九年一月発行）までは同人としては熱心な方で十四回書いてゐるが、このあと就職がきまると文学は止めた様子である。就職先は奈良県の天理高女で、これがいま俳諧書の蒐集では日本一の天理図書館の機縁になったのだとわたしは承知してゐる。終戦のあと、勤め先の研究所がつぶれて困ってゐるわたしをそこへ紹介してくれたのも、もとより杉浦だし、わたしは研究室に積まれた藤井紫影先生の全蔵書と昼いっぱいはともにをり、杉浦の推輓者だった顕原退蔵博士にもお目にかかる機会を得た。天理図書館にもコギトはほぼ三分二ほどあるが、杉浦とは、天理に立ち寄った時に会ふだけで、文学の話ももとよりしなかった。篤学だった杉浦にとってコギトは本当はなんでもなく、当時わたしの感じたような少年感傷の賜だったのだらうか。評論家の竹内好が高校の寮で同室だったことは、このごろはじめて聞いた。親切で優しいが、いつも計画があって、酒をのみ夜を徹して話すこともなかったことがくやまれてならない。

このごろ近くにゐる蕗子さんと時々会ふがお父さんそっくりの表情でびっくりすることがある。同じく国文をやり、お父さんと同じやうな仕事をしてゐるのを前号ではじめて知って、杉浦も喜んでゐるだらうと思った。わたしにはさういふ子供がゐないのである。